

# モダンデザインの背景を探る アヴァンギャルド住宅出現にみるクライアント像—その1—

塚口真佐子

Behind the Evolution of Modern Design: Research and Analysis on the Clients of 1920's Avant-Garde Houses  
Tsukaguchi, Masako

## I. はじめに

モダンデザインの発展経過を観るに、歴史様式の混乱状態に始まり、様々な運動や思潮が1920年代後半には現在に直結するメインストリームに収束する。この過程の20年代の代表的住宅を見ると、ある共通した施主像が検証される。革新的な自身の社会的政治的立場を、住宅で表明しようとする姿勢であり、従来のな家庭像とは相容れない変則的な家族像である。彼らは伝統に逆らう強い意志で、社会改革などの目的を持ち、建築家と協同しモダン住宅を出現せしめたのである。公共建築とは違い、ユーザーの同意がなくては作品は生まれない。ここでは代表的作品とされる20年代の、当時としてはアヴァンギャルド住宅の施主像、生活意識や社会観と住宅との関係、設計プログラムを分析することで、モダン住宅誕生の必然的背景を探りたい。前回に続き、生活者像と特にジェンダーのからむ意識が、どのようにモダンデザインの発展に寄与したかを論じたい。

家すら、あまりのアヴァンギャルド性のため、正當に評価できなかったキングズロードの家(1921-22)というモダン建築のパイオニア作もある。この評価が定まったのは近年で、当時は、展覧会出展の検分に訪れた評論家も、外観を一目見て去って行くありさまだった。このような逆風の社会環境の中、どのような人々が、敢えて施主となっていったのであろうか。

以下の住宅を取り上げるものの、今回、紙面の都合で2例のみを検証する。

- A. シュレーダー邸(1923-24)
- B. キングズロードの家(1921-22)
- C. バーンズドール邸(1919-21) (次回)
- D. ガルシェのヴィラ(1926-1928) (次回)
- E. ゾンナーベルト邸(1931-1933) (次回)

## II. モダンデザインの住宅 そのアヴァンギャルド性

20世紀初頭前後から4半世紀過ぎた頃までの、代表的建築やドローイングを見るに、ほとんどが公共建築で住宅は数少なくイメージも乏しい。20年代になり、シュレーダー邸(1923-1924)やサヴォア邸(1929-1930)が登場する。共にモダンデザインを強烈に視覚に訴える。同じく大きな反響を呼んだものに、ドイツ工作連盟主催の建築博ワイゼンホフ・ジードルンク(1927)がある。このように、モダンデザインの住宅は、20年代になって初めて可視的になり話題性を持ったとみてよいだろう。公共建築とは違い希有な上、従来の住宅とは劇的に違和感があり、斬新というような好意的表現でなく、おかしな住宅として人々の目をそばだてたのである。シュレーダー邸には大勢の見物人が訪れ、「キチガイハウス」とからかわれる。ジードルンクでは、白塗りの立方体という姿にアフリカの民家や、ラクダにヤシ、ターバン姿の現地人が連想されるなど、揶揄や批評が起こる。集合住宅では、フランクフルト都市建設局が1927年から32年頃までに、30程度の団地を建設しているが、いずれも低所得者用で、20年代にモダン住宅にプレステイジがあったとはとても言いがたい。

コルビュジェの言う近代建築の5原則とは一致しないものの、アメリカではいち早くF.L.ライトがウィンズロー邸(1894)、トーマス邸(1901)、ロビー邸(1905-09)などを自由な平面計画で設計する。「何と切り切ったこと」と近隣に呆れられ、竣工するなり「ハーレム」「蒸気汽船」など嘲笑的なニックネームが付き、新たな施主に「他人に笑われたくないので、あのようなデザインにしないで欲しい」とまで言わせている。また、評論

## III. クライアント像 総論として

上記の住宅の施主像には以下の共通項が見られる。

- 女性が施主か、あるいは女性のイニシアチブによる住宅
- 裕福な階層の出身で高学歴女性
- 思想的にはラディカルで社会活動家、社会活動のための住宅
- 通常の家族とは異なる構成メンバー 独身者や非婚主義、複合家族

彼女たちは裕福ながらラディカルで、教育程度が高く、自邸を芸術の後援活動や、女性参政権や労働者の権利のための活動拠点として開放するなど、政治活動をおこない、家庭よりも外に活動の場を求めた。その結果、結婚は女性を隷属させるとして視野から遠ざかる。じじつ、女性施主は独身者や未亡人など独立した女性、あるいは既存の枠にない交友関係を持つ女性たちが主で、結婚にゴールを求めない新しい生き方の提示としての住宅であった。スウェーデンの性科学者エレン・キーの影響を強く受け、性的には自由で、産児制限の新技术も味方する。住宅に託したのは、「女性」という従来の枠に縛られない意識や姿勢を、建築の力を用いて表明し、アイデンティティのラディカルな表明であった、と言える。

また、彼女たちは、家族という幾分封建的な単位から離れ、個人を基本として想定出来る立場でもあった。家族ではない他の仲間との住宅のため、設計プロセスへの参加も求めた。平面プランも社会活動への適応など、さまざまな要求に応じ、従来のではない流動的な平面プランに変容した。

建築家側にとっても、家庭という定義を塗り替える住宅の依頼は、建

築での変革を具現化出来る機会であった。建築の平準化に取り組み、新しい社会のあり方を建築で提案しようとする建築家にとって、新しい生活の単位を想定し取り組むことは重要な実験だったのである。

#### IV. 各論

##### ■ シュレーダー邸 (1923-24) リートフェルト設計

###### 施主シュレーダー夫人の人物素描

裕福な弁護士夫人のトゥルーズは、姉の影響もあり、芸術家のサークルに加わり、ブルジョワ社会の交際より活動を優先させる。ここにはブルーノ・タウトや左派の政治家、共産党のメンバーが訪れている。理論家の彼女は革新を理解しない人との面談を絶ち、夫は気晴らしに自室の改装を勧め、1921年、リートフェルトを紹介する。「モダンでなければならぬ、それは私の革新精神を反映するもの」と夫人は言う。リートフェルト自身のデザインや色彩は、デ・スティル運動との関わりで培われたものであるが、トゥルーズの誘導と煽動、評論で、リートフェルトはデザインを進める。彼女は革新的インテリアデザイン論も発表する。『『疲れた労働者』の思考の刺激となる空間認識』について語り、「ブルジョワの贅沢は真の建築とは何の関係もない。逆に、相互関係性とフラットな面にベースをおいた新しい建築デザインは、居心地の良さや温かさを強調したインテリアよりも遥かに優れたものである。」などとある。禁止されていたソヴィエト映画フィルムを密かに所持するなど、政治的スタンスは明らかである。

###### シュレーダー邸の概観

6.3m×9mの総2階で、1階は階段室中心の平凡な室構成だが、2階はパネル区画の1室構成で可変性空間である。リートフェルトにとって建築とは家具と共通で、分割・平準化されたパーツのアセンブリーで、目的に合わせ構成される空間である。しかし、夫亡き後の3人の子供と1つのオープン空間で生活、というのはシュレーダーのコンセプトである。「壁をはずせますか?」という依頼が出発点だったのである。芸術家などとの交流に子供を加えるのがねらいだった。さらに過激なことに、誰もが自分で料理するよう、1室構成の各個人スペースに、シンクと食器棚、配線が当初は計画された。これは、家族の再定義の一環を物語るもので、女性の権利と併せて、家族各人のお互いの関係と個人の責任を形に表したものだ。当時、裕福で尊敬されるブルジョワ精神とは、規律正しく、抑制され、ヒエラルヒーの遵守である。これが、建築デザインにより排除されたのである。1人の女性のヴィジョンに深く関わったシュレーダー邸であった。

##### ■ キングズロードの家(1921-22) ルドルフ・シンドラー設計(自邸)

###### キングズロードの家の概観

モダン住宅のパイオニアとなる作品である。デザインはデ・スティルの系譜を引くとされるが、その第一作、シュレーダー邸より早きこと3年である。家族だけの住まいではなく公開され、友人夫妻との共同住宅という実験作でもあった。平面計画は風車型で、2組の夫妻4人がそれぞれスタ

ジオというスペースを占有し、どちらの家庭にも伝統的なルームタイプを排している。各人がスタジオという名の独立した対等の部屋を持ち、家事負担は共有、というコンセプトを具現化する。夫妻で1つのL型を構成し、友人夫妻のL型とゲスト室と車庫のL型、計3個のL型で構成された平面で、コアには共有キッチンが配された。各スタジオはよりユニバーサル空間をめざし、床座の採用もあり、家具の配置で可変となる空間であった。

L型それぞれは中庭を持ち、室内とはほぼ全面的に引き戸で区画され、中庭と室内は一体となった。この屋外スペースは、100人程も集まる公開前衛芸術イベントや政治集会などに活用された。現実的には心地よい家とは言いかねたようで、さまざまな滞在者が美を認めながらも不満の声を残している。ラディカルで、概念において至高を目指しながらも、住宅に期待される質を欠いていた住宅、この誕生にはどんな背景があるのだろうか。

###### ポーリン・シンドラーの人物素描

ここにも勇敢な妻ポーリンがいた。裕福な家庭に生まれ、名門女子大スミスカレッジに学び、在学中から政治活動に加わり中退する。彼女はシンドラーに出会う前、既に公共的自邸を描いている。当時、彼女はアダムズ創設のセツルメント、ハル・ハウスに在籍し社会活動に関わっていた。アダムズは31年にノーベル平和賞を受賞する。ポーリンはアダムズの考えに基づくセツルメント、すなわち文化活動も含む運営を体験し、キングズロードの家を実際にミニ・ハル・ハウスのように展開していく。そのために計画された家であり、同じく進歩的傾向のシンドラーの、革新的造形才能が妻によって方向付けられた社会的意味をもち、処女作に結実する。

衣服は貫頭衣のようなものを身に付け、新学説に従った食生活やフィットネス、屋外で睡眠という新健康法を取り入れている。社会改革や教育、精神分析の最新学説を話題に取り上げ、アヴァンギャルド誌を購読し、芸術や音楽、舞踊、演劇、写真、絵画などの、世界の新潮流を吸収、という現代から見ても先を行くライフスタイルであった。

多士済々が入り出し、政治や芸術イベントを提供する、それが生涯を通じて連続する、現代でもこの世な例は希有であろう。住宅自体も、仕上げこそローコストだが、空間性は非常に豊かで素晴らしい。キッチンや浴室も現代性を感じさせる。モダン住宅のパイオニアというより、将来を先取りした先進の住宅と感ぜられる。その背景には、過激とも言うべき妻の主張とそれに応えた夫の創作があったのである。

###### 参考文献

Logan, Friedman, Alice T., *Woman and the Making of the Modern Houses* (New York: Harry Abrams, Inc., 1997)

Smith, Kathryn, *Schindler House* (New York: Harry Abrams, Inc., 2000)

Noever, Peter, R. M. *Schindler* (L. A. : MAK Center for Art and Architecture, 1995)

Gebhard, David, *Schindler* (London: Thames and Hudson, 1971)

Gill, Brendan, *A Life of Frank Lloyd Wright* (New York: Da Capo Press 1988)

塚口眞佐子「シンドラーとは誰か モダン建築の偉大なパイオニア再発見」建築協会 建築と社会03

大阪樟蔭女子大学インテリアデザイン学科 准教授